

ラグビー人気復活の軌跡 2019

～神戸からオールジャパン～

流通科学大学 山口ゼミ B

○上田 峻大 石橋 孟 山本 歩波 田中 謙伍 山田 真吾 繁田 有紀

1. 諸言

2009年7月28日に行われた国際ラグビー評議会（以下「IRB」と略す）の理事会において、2019年 Rugby World Cup（以下「ラグビーワールドカップ」と略す）の開催が決定した。ラグビーワールドカップを含むメガスポーツイベントの開催は、①社会的効果、②経済的効果、③環境的効果、④文化的効果など多くのベネフィットを開催都市にもたらすことが報告されており（木田, 2013; 山口ら, 2015）、日本での開催は、「する・観る・支えるスポーツ」の振興に大きな貢献を果たすと考えられる。

2015年3月2日に全国の14の会場でラグビーワールドカップが行われることが決定し、私たちの住んでいる、兵庫県神戸市「ノエビアスタジアム神戸」が含まれていることは、大変喜ばしい話題である。しかしながら、ラグビーワールドカップ開催には、大きな問題点が垣間見える。それは、「大会の収入源」である（山口ら, 2011）。IRBは、「ラグビーワールドカップ開催において、入場料収入だけで賄わなければならない」と規約を定めており、1980年代国立競技場がファンで満員になったり、「スクールウォーズ」のラグビーの学園ドラマで人気スポーツになったりなど、あの頃と比較すると、ラグビーの人気は決して高いとは言えない。笹川スポーツ財団の「私の好きなスポーツ」や「種目別直接スポーツ観戦率」などの調査結果でラグビーはランク外など、人気は陰りを見せており、観客動員数の確保はもちろん、ラグビーブームが再来する可能性がある今後に向けて、ラグビーの人気復活を推し進める提案が必要である。

2. 現状

2.1. 世界ランキング 10 位 (World Rugby, 2015 年 10 月 19 日現在)

今回のラグビーワールドカップ 2015 では、日本代表が世界ランク 3 位の南アフリカに勝つなど、最終的には予選敗退したものの、日本国民の注目を集めていることは確かである。今大会を迎えるまで、日本代表のラグビーワールドカップの通算成績は 1 勝 21 敗 2 分けという、圧倒的弱さであった。日本にラグビーが導入されてから約 100 年が経過し、1870 年代に導入した野球やサッカーとほとんど変わらない。しかしながら、日本の野球やサッカーは世界に通用するレベルにまで達してきている反面、ラグビーはどうだろうか。「世界ランキング 10 位」だけを見れば、上位に属しているように見えるが、実際はそうではない。ラグビーワールドカップの通算成績を見れば世界に通用していないことが一目瞭然である。

2.2. 日本のラグビー競技人口（12万2368人）

2011年現在、日本のラグビー競技人口は12万2368人である（World Rugby, 2011）。そのうち女性が4659人である。日本ラグビーフットボール協会（以下「JRFU」と略す）は、2019年ラグビーワールドカップまでに競技者を20万人にまで増やす目標を掲げているが、現在4人に1人は高齢者であり、子どもの数は過去最低の1617万人を記録し、34年連続で減少傾向にある（総務省統計局, 2015）。そのため、少子高齢化社会の日本においては、ハードルの高い数値目標と言える。

2.3. 行政の取り組み

ラグビーに興味を持ってもらおうと、すでに様々な組織機関で取り組みが行われている。「2019年ラグビーワールドカップ普及啓発等事業」と呼ばれる文部科学省が行っている事業で、1億4672万円を投資し、ラグビーの普及啓発に係る事業を展開している。事業概要の中に「平日の放課後もラグビーができる環境を整備し、競技者の拡大を図る」とあり、学校のグラウンドを使用して行うことが一番の理想とされているが、野球やサッカーなどのスポーツ少年団が使用している可能性が高いため、現実的にはグラウンドの使用は難しい面がある。小学校では部活動がないため、ラグビーに参加できる可能性はあるが、中学生の部活動所属率は中学1年生が91.8%、中学2年生が89.7%、中学3年生が23.8%であり、（ベネッセ教育総合研究所, 2008）、部活動を優先すると集まらないことが考えられる。また、平成20年の6月に文部科学省「小学校学習指導要領解説 体育偏」にタグラグビーについて記載されているが、現段階ではあまり浸透しておらず、詳しいデータは無いが、タグラグビーを授業に取り入れている小学校が東京都や大分県、鹿児島県など、その数は決して多くない。それ以外にもJRFU主催のタグラグビー教室や「タグラグビー普及プロジェクト」を実施し、タグラグビーを全国の小学校に紹介しているが、授業にあまり取り入れられていない現状を見ると、紹介だけで止まっており、効果はあまり得られていないと考える。

2.4. ラグビーについての認知度

私たちはラグビーに対する認知度を把握するために、2015年10月13日（火）に本学大学生212人（男性;140人,女性;72人）を対象にアンケート調査を実施した。図1は「ラグビーへの関心」、図2は「ラグビーワールドカップ2019日本開催について」の調査結果のグラフである。

調査の結果、ラグビーへの関心については、関心がない大学生が多いことが明らかとなった。ラグビーワールドカップ2019日本開催については、知っていた人が56%と半々であったが、一方知らない人も過半数近くいたため（44%）、まだまだラグビー認知度が低いことが明らかとなった。これらの結果をふまえると、ラグビーの認知度はまだまだ低いと感じたため、今後新たな方策を立てながら、ラグビーの認知度並びに関心を高めていく必要がある。

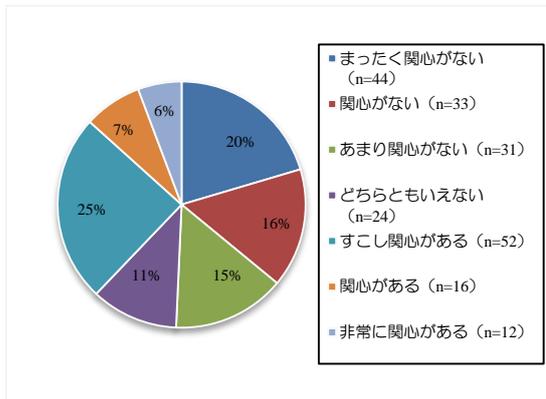


図1 ラグビーへの関心

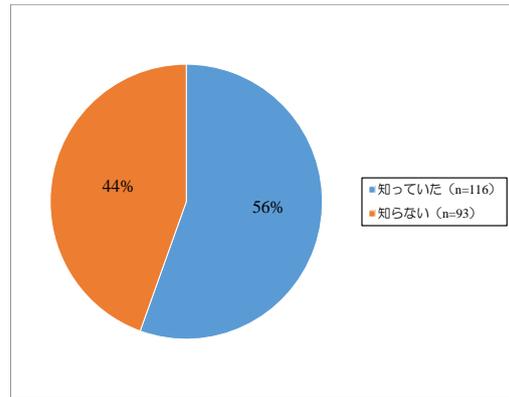


図2 ラグビーワールドカップ 2019

日本開催について

本学大学生へのアンケート調査 (2015) を基に作成

3. 政策提言

3.1. タグラグビーの種目追加を行政に提言

ラグビーワールドカップ 2015 の快進撃によって、日本国民から注目を集めたものの、アンケート調査の結果を読み取ると、ラグビー認知度はまだまだ低いことがわかる。1980年代のあの頃の人気を取り戻すには、観客動員数の確保、ラグビーの認知度向上、および競技者の増加が必要だと考える。そこで私たちは、子どもから高齢者まで参加できる、「スポーツクラブ 21 ひょうご」が主催する「スポーツ立県ひょうご」創出プロジェクト事業に焦点を当て、タグラグビーの種目追加を提言する。そのイベント名を「スポーツ立県ひょうご創出プロジェクト事業 タグラグビー交流大会」と名付ける。

「スポーツクラブ 21 ひょうご」は、兵庫県内の全 827 小学校区 (2010 年現在) において 2000 年度よりスタートした、兵庫県独自の総合型地域スポーツクラブの育成補助事業である。その運営団体が主催で実施している「スポーツ立県ひょうご」創出プロジェクト事業では、全ての県民がスポーツを通じて楽しさや感動を分かち合い、共に支えあう兵庫のスポーツ文化を確立するため、ライフステージに応じたスポーツ活動の推進をめざす「生涯スポーツ」、本県競技力の維持・向上をめざす「競技スポーツ」、そしてユニバーサル社会の実現をめざす「障害者スポーツ」の振興を図ることを目指している。事業計画の中には、企業と大学が連携したスポーツイベントなどの開催を取り組む創造プロジェクト事業がある。実際に平成 27 年 9 月 12 日 (土) に「スポーツクラブ 21 ひょうご」全県連絡協議会丹波支部クラブが主催で、グランド・ゴルフ交流大会が開催されている。

3.2. 具体的な方策としてのイベント内容

神戸市に本拠地を置く、プロラグビーチームの神戸製鋼コベルコ・スティーラーズ (以下「神戸製鋼」と略す) と、兵庫県のスポーツクラブ 21 ひょうご全県連絡協議会、そして私たち流通科学大学と産学官連携を行い、兵庫県のスポーツクラブ 21 ひょうご全県連絡協議会が中心となる、「スポーツ立県ひょうご」創出プロジェクト事業の一環イベントの

1 つに、タグラグビーの交流大会を神戸製鋼の練習グラウンドである灘浜グラウンドにて開催することを提案する。今回、協力を仰いでいる、神戸製鋼の選手をゲストとしてお迎えし、参加資格は、スポーツクラブ 21 の会員のみターゲットを絞り、性別や年齢、障害の有無に関係なく、小さな子どもから高齢者までたくさんの方々に、ラグビーに興味を持っていただくことを目的とする。

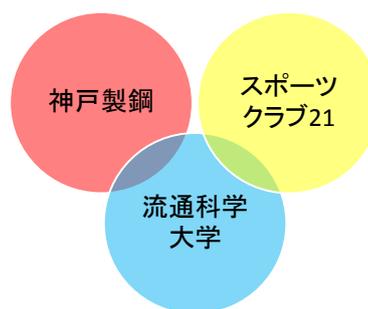


図 3 産学官連携のイメージ図

3.3. タグラグビーの推進を通し、神戸からオールジャパンへ

神戸は歴史的に外国との交流が大変盛んな街であり、西洋の文化と共にスポーツも伝来した。その際に、1870年9月23日、神戸レガッタ・アンド・アスレチッククラブと呼ばれる、横浜に次いで日本で2番目に歴史がある総合型地域スポーツクラブが、146年経過した現在でも活動している。年々、総合型地域スポーツクラブのクラブ数・会員数は減少しており、活動していないクラブも多々あり、総合型地域スポーツクラブの歴史がある兵庫県としては、クラブ数・会員数の減少について、気にかかる問題点である。そこで、私たちが提案する「スポーツ立県ひょうご創出プロジェクト事業 タグラグビー交流大会」を実施することで、今回のラグビーワールドカップ 2015により、ラグビーを実際に行ってみたい方が増加する可能性が考えられる。しかし、ラグビーを行うには広い敷地と人数が必要であり、諦める方が多くいるかもしれないが、タグラグビー交流大会を提供することにより、バスケットボールのコートと5人程度の人数が集まればタグラグビーの試合が行えるため、誰でも参加でき、会員数増加に繋がると考える。本イベントを実施することによって、興味を持つ神戸市民が増え、緒言に記載した「大会の収入源」について観客動員数確保の問題点を解消する可能性があり、総合型地域スポーツクラブでの会員数の増加、そして競技者数の増加により、JRFUの目標達成に近づく可能性が高くなるなど、本政策提言にはメリットが多くあると考える。

まずは神戸を中心に、次に兵庫県全体でラグビーの普及を進め、最終的にはオールジャパンへ活動の輪を広げたい。2019年、神戸及び日本全体でラグビーワールドカップが盛大に盛り上がるのが、ラグビー人気復活の奇跡になるのではないだろうか。

4. 主な参考文献

日本ラグビーフットボール協会ホームページ、World Rugby ホームページ

<<http://www.tagrugby-japan.jp/guide/>>、 <<http://www.worldrugby.org/>>

山口志郎・石黒哲朗・山口泰雄 (2011) ラグビートップリーグにおけるファンイベントと観戦意図に関する研究: 神戸製鋼コベルコスティーラーズに着目して. スポーツマネジメント研究、Vol 3. No.1. p.77-93.